

対象資料は4点である。長さは1～1.5cmの間に収まる。

以上、筆者の編年観に当てはめて古い順から規格をみてきたが、基部加工ナイフ形石器についても明確に小型化の傾向が見て取れる(第31図)。今後は同じVI期と考えられる遺跡間の石器組成の偏りをどのように評価し、それらの特徴が県内において一般化できるのかどうかを検討する必要がある。

(3) 台形石器

① III期 宮ヶ迫遺跡(第25図)

対象資料は15点である。1.5cm～4cmの間に分布がみられる。長さの平均値は2.36cmである。

② IV期 西丸尾遺跡(第26図)

対象資料は4点である。2～2.5cmの間に分布がみられる。長さの平均値は2.15cmである。

③ V期 小原野遺跡(第27図)

対象資料は12点である。1.5～4cmの間に分布がみられる。長さの平均値は2.59cmである。

④ VI期 粘地遺跡XII層(第28図)

対象資料は10点である。1～2.5cmの間に分布がみられる。長さの平均値は1.9cmである。

⑤ VI期 西ノ原B遺跡(第29図)

対象資料は4点である。1点やや大型の製品がみられるが、概ね1～2cmの間に分布する。長さの平均値は1.77cmである。

以上みてきたように台形石器についてもある程度小型化の傾向がみられる(第32図)。ただし、石器自体がそれほど大型でないこともあり、前掲2器種ほど小型化が顕著にみられず、比較的緩やかである。いずれの時期も2cm前後の製品が組成されている。ただし、2cm前後の製品を分布の中心として、時期が下るにつれて比較的大型な製品(3cm以上)の組成が少なくなり、逆に小型の製品(1.5cm前後)の組成が増える傾向にあることが指摘できる。特にVI期については比較的大型の製品についてはほとんどみられず、台形石器についての小型化の画期はV期とVI期の間にあるのかもしれない。

(4) 小結

石器の小型化について、三稜尖頭器、基部加工ナイフ、台形石器の3器種を使用して規格面から検討してみた。筆者の編年観に沿ってみた限り、全器種について緩急の差はあるものの、小型化の傾向が実証されたといえる。また、その中で、基部加工ナイフについては単純な小型化がみられたが、三稜尖頭器については資料の制約から規格面についてII期の構成に課題が残った。台形石器については単純な小型化とはいえ、小型化の画期がV期とVI期の間にある可能性が見いだせた。細かい課題はあるものの、石器自体の小型化は客観的に証明された。今後は小型化の背景にある原因について考えていく必要がある。

